

鴨居羊子のら犬のボケ 東京創元社刊

のら犬のボケ

鴨居 羊子 著
東京創元社

保存限定版

暖 簾 山崎 豊子

A五変形箱入上製本 番号入り
装画・内間安理・定価九八〇円

いのちを賭けて、暖簾を護った八田吾平（主人公）の生涯は、たたかう男のシンボルである。本書が大ベストセラーとして今尙歓迎されている秘密はここにある。大阪を代表し、商人の魂を鼓舞するこの名作を、真に生活の伴侶としたい方々のために贈る限定・豪華・保存版。

並製・B六判・定価二五〇円

東京 創元 社

（振替 東京一五六五）

のら犬のボケ・目次

いなくなったボケ	9
ボケと初めて出くわした	15
ボケの友だち	24
九官鳥のケー子と父の想い出	30
ボケとの密会を邪魔する人間ども	36
切符うりのおばさん	44
ボケと私の洋服スタイル	53
ボケ的中性論	61
はかない処女	69
馬鹿になったケロ	75
アカ毛のジャン	81
ジャンは哲学者	86

小さな海の旅	165
三太病床日記(2) カステラとラムネのお見舞	161
三太病床日記(1) 赤いお薬	149
ブンちゃんと三太	143
うどん屋の三太	136
メリーとおばあさん	130
駄菓子屋のメリーさん	120
車屋のクロ吉	115
ジャン帰る	106
消えた犬たち	102
日本の国と犬捕り	98
ジャン捕らわる	92

失われた地上の星	172
ミスター・セバード	177
かっぱらいのフク	181
天国へいった小犬	186
幼き者の世界	195
夾竹桃の小径	205
青い目をしたパリの小犬	211
荷車一家の二匹のシロ犬	217
くず拾いのマル	222
働きものの残パン屋のポインター	226
ラムネ屋のハチ子	231
古代エジプト学者のコリー	236

マダムに買われていったコリ	241
犬屋の売れ残り	247
焼跡のクロ	250
あとがき	269

写真撮影・土門拳

の
ら
犬
の
ボ
ケ

いなくなったポケ

はや、晩春。桜もようやく散りはじめたある日の朝。

花屋の前までやって来ると、あたふたと、バスの切符売り場のおばさんが、走って来て、いきなり、私の洋服の端っぼをつかみながら、しゃべりだした。

「あれが、あなた。捕られてしもうたんや。昨日あんたがバスに乗って行ってしまったすぐあとで……」

「へえっ？ ポケが？」

「そ、そうすがな。犬捕りやがな。野犬狩り」

私は内心、決して、そんなことは本当ではないと思った。と同時に、とうとう来たるべき悲劇がやってきたと直感した。しかし私は犬捕りの現場を見たことがないので、空をつかむように、信じられない。

「ど、どんなにして捕るの？ 犬捕りって」

「あんた。知らないの。引っかけるのさ。針金で」

「お、おばさん。見てたの？ ボケの捕られるところ」

「いいや。キャンンっていう声が聞こえたもんで、あーやられたと思うて、目かくししてましたんや。可哀そうに」

私はブルブルっと体の奥底がふるえ出した。心の隅では必死になって、ボケは捕られやしないと打ち消している。おばさんはウソを言ってるんだと思ってみた。けれども見廻してみると、かき消したようにボケの姿が見当らない。私は犬のようにクンクンとあたりをかいでみた。やっぱり本当かもしれない。とり返しのつかぬ気がした。

「なぜおばさん。そのとき犬捕りに頼まなかったの？ 今から取りかえしに行こうか」

「どこへ取りかえしに行ったらええか、分らへんじゃないの」

「それで、どうされるんだろ。殺されるのかしら」

「動物園のライオンだよ。餌食さ。きつと」

私は耳をおおった。ライオンの檻の隅で、ふるえているポケの姿が浮かんできた。

私はお婆さんの袴もとをつかんで、ゆすぶりたい衝動にかられる。まるで、ポケが救われるか否かの鍵は、このお婆さんが握っているように思われた。

「ねえ。動物園へ行って、園長さんにおねがいしようよ。お婆さん。そして今度は、鑑札と首わをつけて私たちで飼ってやろうよ」

お婆さんは、アカン！ という風に首をふって笑った。私は一時もじっとしておれないようにそわそわと心がせいてくる。にもかかわらず、お婆さんが落ちついているのが、妙にしゃくにさわってきた。

「それでもなあ。あんた。あれもや、や、子ができて、また苦勞するより、今のうち捕られて

しもうた方がええと、みなでいうて慰めとりますのや」

おばさんはあきらめ顔でそう言った。日本の女の諦観である。ボケの悲劇に目をつぶって、取りかえそうともせず、すぐ諦めにかかる、そんなおばさんたちが、急に憎らしくなりだした。まるで、おばさんが、ボケの捕られた責任者でもあるかのように思われ出してくる。花屋のバケツのもとには、ほんとにボケの姿が見当らない。駄目だ。やっぱり本当だ。

おばさんにサヨナラもいわずに私は歩き出した。ボケの味方であるおばさんですら、敵のような気がしてきた。私はすっかり孤独になって、ボケがいなくなったということを経験しかえしながら歩いた。そして、思いもよらぬ大きな宝ものを失ったことに気がついた。

ふりはらっても、ふりはらっても、溢れてくる涙がとまらない。可愛いボケだった。いつもなら、この街角までついてきてくれたものを。ピラミッド型に足を開いて虚ろな眼をして別れをいうボケの哀愁が身にしみるように思い出される。もう取りかえしがつかない。いや、あれのことだから、明日にでもひょっこり例の笑顔で帰ってくるかもしれない。

一体ボケが何をわるいことをしたというのであろう。ボケの素直なうららかさは、あの花屋の辺りに自然と流れていた。ボケは暴力を嫌った。うどん屋のあんちゃんや、焼き鳥を仕入れるおっさんたちが、自転車で威張ってやってくると、ボケはワンワンと吠え出した。いつも、ねているくせに、たまたまボケが吠えるのは、こういう一見たくまし気な男たちに対してである。彼らに愛嬌をふりまき、とりいって、うどんの一玉ぐらいもらおうという野心もないようであった。ボケの味方は考えてみると、バスのおばさんや、花屋のおばさんや、化粧品屋のねえさんという、貧しい、心のやさしい女の人ばかりである。

私は何かに訴えたかった。『ボケは何もわるいことをいたしません。私たちに、つましい生の喜びと平和とを、いつもそっと与えてくれました』私は裁判所へでも、どこへでも出頭してボケの陳述をしたかった。

しかし、こうしてる間にも、もうボケは死んでしまっているかもしれない。犬捕りというのは、幼いころ聞かされた『人さらい』のようにこわいものだと、今さらに私はふるえ上ってきた。

次第に私は心の中で、“ボケが死んだ”——と繰り返している。花の散るのも待たないで、ボケは死んでいった。思えば短かい放浪の一生である。

私は一日中、気がめいって仕事も手につかない。私にとっては大きな悲劇であるボケの死を、会う人ごとに打ち明けたい気持になった。誰もがボケのために泣いてくれそうに思えたけど、よくよく考えれば、世の中にとっては一匹の野良犬の死は、虫ケラの死と同然であった。ボケがいなくなっても、世の中は当り前の顔をして動いている。

私はあてもなく街をさまよい歩いてはみたが、悲しみをぬぐうことはできなかった。野原へ出て心ゆくまで泣きたかった。